



現代人形研通信

2号 2024年2月23日発行

目次

- ・現代人形研 活動報告
- ・展覧会レポート 第11回クラフトアート人形”マッチング”コンクール
東京展
- ・インフォメーション
- ・特集 特別インタビュー ムットーニ
- ・徒然コラム（設立記念展参加者）
- ・お知らせ



特別インタビュー

光と影が織りなすムットーニの世界

八王子市夢美術館で個展「ムットーニワールドからくりシアターⅤ」を開催中のムットーニ氏に、
絵画から立体への経緯、作品づくりについて伺いました。

特集インタビューはこの通信最後部に掲載しております。

「紙のメルマガ」はメールマガジン配信時とは異なる編集をしているため、メールマガジンとはデザイン、画像や構成が異なる箇所があります。予めご了承ください。

現代人形研活動報告

「設立記念展」開催

1月19日～21日 東村山市中央公民館

当会の発足を記念する初の人形展「設立記念展」では会員とゲスト作家25人の作品を展示しました。私たちが紹介する創作人形は、一般の人にとって初めて見る、知るといことがほとんどだと思います。

会場を何度も回って見直す方、アンケートで好きな作品を尋ねるとどれも素晴らしくて選べないという方、私たちにありがとうと感謝される方という方が少なくありませんでした。東村山市長も来場、しっかりと鑑賞してくださいました。

これからもさまざまな素材を使って人の姿を表現する人形の面白みを、伝えていきたいと思います。

出品作品は当会ホームページのEXHIBITIONに掲載しています。

<https://www.gendainingyo.com/exhibition>

この「設立記念展」に続く当会の会員作品展は11月27日～12月1日（予定）に横浜人形の家の多目的室で開催いたします。参加募集はこの通信でお知らせします。



第 11 回クラフトアート人形 ” マッチング ” コンクールー人形の矜持ー 【東京展リポート】



今年で 11 回目を迎えるこのコンクールでは東京展、関西展ともにギャラリーやイベント主催者などが審査員となります。各賞を受賞する出品者は、各審査員の事業で紹介されるチャンスを得ます。出品者のなかには新たな出会いを求めて既にプロとして活躍している作家もあります。東京展会場で主催者のクラフトアート人形コンクール実行委員会の高野明子さんにお話を伺いました。（聞き手 羽関チエコ）

--- 今まで公募にいた方がどんどん活躍して招待枠に入ってきましたね。

去年の 10 周年記念展がきっかけとなって、過去の受賞者から選抜する招待作家の枠をかなり広げました。公募の方にはポテンシャルの高い作家の方もいるので、招待作家の方を入れ替えていくのもいいと感じました。また、東京と大阪のお客様の好みも少し違うので、招待で大阪だけ出る人、東京だけ出る人を分けてお声がけするようにしています。

--- 東京と大阪はどのように違いますか？

東京は会場が貸しギャラリーであること・お客様がコアなファンが多いことから、球体関節人形や、That's 人形的なものを多めにしていますが、大阪会場はデパートなので、何もご存知ない方もいらっしゃるため、動物ものやかわいいものを増やして、いわゆる人形ファンではない人がお買い上げになるような作品もラインナップするようにしています。

--- このコンテストで成長し、注目に値するという作家はいますか？

皆さんそれぞれにそうなんですが、たとえば haruhi さんは目覚ましい活躍をされています。それはご本人が数多くの公募展にお出しになっているというご自身の努力によるので、うちがどうしたこうしたということではなく、素晴らしい方だと思っています。あちこちで見えるようになった方は、自らあちこちに出しています。出展先を絞っている方では、てらおなみさんがうちの企画展の他アラビクなど決まったお店に出して確実に成果を出されていますね。



haruhi（招待作家）



松本実久（招待作家）昨年は公募部門で参加

--- 東京で見ていると、関西の作家の力みたいなのを感じますね。

関西の作家については、関西であんなにブレイクしたのに東京では難しいねというのが数年前まで続いていましたが、最近では東京にも露出するようになり活躍の場が広がるようになりました。

--- 東京と関西のお客さんの違いはありますか？

東京は好みがはっきりしてこだわりが強いお客様が多いように見受けませんが、大阪は決まった作家のお客様という感じでなく、初めて見た作家でも「これいいね！面白いね！」と言って「この人も、この人もいい。今度はこの人を買っちゃった」というお客様が結構いますね。東京のお客様もいろいろ見てはくださるのですが、「この人も出るなら見に行く」というような作家へのこだわりが強いかなと感じます。

--- 高野さんはまったく畑の違うお仕事（化学関係の専門職）から人形の仕事に転向されたのですが、高野さんにとって人形ってどうですか？

人形は楽しいですね。多様な表現があるというところ。絵画だと飾ることに限定されますが、人形は飾れるものから遊べるものまで、役割がいろいろありますね。昨年の松濤美術館での展覧会（注）が人形の幅広さをよく表していると思いました。それこそラブドールの需要もあるというところが。必要としている人にとっての人形、求めている役割が幅広く面白くもあります。でも創作人形展ではラブドールは展示できない。この幅広さがすごいと言いたいけど、一緒に展示すると殺し合っちゃいますよね。そういうのが難しいと思っています。販売と展示の違いかな。

--- ラブドール OK ですか？

私は面白いと思いました。松濤に出ていたようなものは、実用的な部分でとても考えられているでしょう。使えるという意味で一種の「用の美」というか。そのへんに技術者の粋が尽くされているのだらうと想像すると、私などはグッときますね。見た目が感じよくできているだけでなく、どんなに使いやすくできているかということも工夫が尽くされているものは、ラブドールに限らず面白いし美しいと思っています。

--- 今後新しい計画があると伺いました。

今までできるだけジャンルを問わずにやってきましたが、コンクール出身者からアートの分野で活躍する人がでてきて、そういう作品を人形展で展示すると、人形ファンからは「高いね」と思われてしまい、人形と一緒に販売する難しさを感じてました。可愛い人形やぬいぐるみなどとアートの作品の両方制作している方も、人形展では後者が売れにくいのです。そこでアートとしての人形に特化した展覧会を大阪のデパートのアートギャラリーでやろうと考えています。

（注）「私たちは何者？ ボーダレス・ドールズ」展
2023年7月1日（土）～2023年8月27日（日） 渋谷区立松濤美術館で開催。あらゆる年代、種類の人形が展示されるなかで、オリエント工業他のラブドールが展示された。

関西展の展示予定

第11回クラフトアート人形"マッチング"コンクールー人形の矜持ー＜大阪展＞
2024年3月6日（水）～11日（月）
10：00～20：00（最終日17：00閉場）
阪急うめだ本店 9階 アートステージ

併催・HELLO! DOLLS selection
2024年3月6日（水）～12日（火）
10：00～20：00（最終日17：00閉場）
阪神梅田本店 8階 ハローカルチャー2

いずれも入場無料
詳細 <https://salon.craft-art-doll.com/>

公募作品展示部分

東京展会場にて 東京展 2024 年 2 月 4 日(日)~10 日(土) 東京交通会館 地下 1 階ゴールドサロン
東京展出品者数 公募 28 人 招待 17 人

既にプロとして活動している人、アマチュアの人、素材もビスクから布や樹脂、木まで幅広い範囲の応募作品が見られました。



あさぎ遥 (ビスク)



矢木マイ (石塑粘土)



佐野純子 (毛糸あみぐるみ)

光と影が織りなすムットーニの世界

これは自分が作ったものじゃない。たまたま自分が携わっただけで、もう彼らの世界がそこにある。

ムットーニの本名は武藤政彦、美術家であり、自動人形師である。自動人形は英語ならばドールでもパペットでもなくオートマータと呼ばれようが、ムットーニの作品は人間の動きを模倣しようとした西洋のオートマータともまた異なる。

小さな箱のなかのシアター、そこに人形や舞台装置があり、それらが動き、数分間の物語が展開する。しばしば音楽が色を添える。箱は対面で少人数で見するのに適した大きさである。

前例がないという意味でオリジナルな作品だが、未知の驚きというより懐かしさを感じさせる。彼の場合は新奇さを求めたのではなく、自分が表現したい世界を追い求めて独自の表現にたどり着いたといえようか。今回は八王子市夢美術館で「ムットーニワールド からくりシアターⅤ」展（註1）開催中のムットーニを訪ね、作品の魅力を語ってもらうことにした。

（取材・文 榊山裕子）



《アナザー・ウィングズ》2023年 ©MUTTONI

下記 URL でこの作品が動いている一部をご覧になれます。
<https://youtu.be/yMJGSQi1A8g?si=1SE7YIPkgWY1ayHk>

——今回の展覧会のことからまずお伺いしたいと思います、八王子市夢美術館での展覧会は5回目になりますね。

そうですね。ただ実はその前に「プレビュー」という短期間の展覧会をやっているのです。実質は6回目です。

——この「からくりシアター」のシリーズに一貫したテーマとかコンセプトはあるのでしょうか？

コンセプトというか、やはりそれだけ長い期間で同じ美術館で1人の作家をやるというのは異例のことだと思うのです。なかには一度やった作家はもうやらないみたいなそういう方針のミュージアムも結構あるので、そういう意味で、実はそんなに何回もここでやらせていただけたと思っていなかった。ところが終わったときに「ではまた2年後ぐらいにやりましょう」みたいな感じで言っていただいた。結局これだけ長いスパンでやらせていただくと、その年その年の近作が出る。だからそういう意味では僕のこの10年間くらいの作品の変遷が、必然的にあるいは結果的にここに並んでいるということになるんですね。ですから明確なコンセプトというよりは、今の作品、近作をここで発表できる、そういう場としてやらせていただいています。

——コロナの時期はいかがだったでしょうか。八王子市夢美術館での先回の展覧会が2018年で6年間空いていますよね。表現者の方々にとってコロナの期間は大変だったと思うのですが。

ところが実は僕はコロナの期間に4回ぐらい展覧会をやっているんです。コロナになりかけたときに藤枝市の郷土博物館・文学館（註2）でお声がけいただいて、2000年2月から3月にかけて「からくりシアター展」をしていただいて、最初の頃は僕が直接行って話す上演会をやっていたのですが、後半はコロナで上演会なしになりましたね、「中途半端になりました」

たね」ということで、では2年後ぐらいにもう一度企画をやってみますということで、22年にもう一度やっています（註3）。その間に21年の秋口ぐらいから群馬の前橋文学館で展覧会をやった。実は前橋文学館に今、萩原朔太郎を題材にした作品を計4台納めているのですが、2台は既に納めていて21年にやらせていただいたときに新たに2台作っているんですよ（註4）。だから藤枝、前橋また藤枝、その間に20年に初台のギャラリー（註5）で展覧会をやっていますので、ありがたいことに実は忙しかった。そういう意味ではコロナはあまり関係なかったですね。

——では絶え間なく作品を作り、発表の場があったということですね。

そうですね。だからずっと作っていましたね。



《サーカス（部分）》2019年 ©MUTTONI

——このメールマガジンは人形作家の方が多くご覧になっているので、ムットーニさんの作品のなかでの人形の役割についてお伺いしたいのですが、最初に人形を作ったのはどういうきっかけだったのでしょうか。子供のときは粘土で作品を作っていたと以前伺いましたが。

油粘土ですね。油粘土は本当にたくさんバケツ二杯分ありましたね。それで60センチのちゃぶ台でジオラマを作って、自分の世界を作って遊んでいました。そういう子供だったんですね。でもその後はもうまったく忘れていたんですよ。まったく忘れていたっていうか意識のなかになかったですね。ところが自分にはそれが表現者として合っていると思っていた平面絵画が、どんどん自分のなかで行き詰まってしまった。本当に困ってしまった時に、アントニー・クラベ（1913－2005）というスペインのピカソの次の世代の巨匠の回顧展が東京都庭園美術館であった（註6）。僕、アントニー・クラベが好きだったので見に行ったんですよ。何か得るものがあるかなと思って。そうしたらもうひどいんですよ。

——「ひどい」とは何がひどかったのでしょうか。

絵が。何がひどいかというと後半、若い頃ではなくて、後期の絵がずっと掛かっていたんですけども、もう、抜け殻なんですよね。自分が若い時に描いたその代表作のコピーみたいな感じにしか見えない。上っ面だけ似ている。「これはアントニー・クラベではない。彼は自分の絵のコピーをしているよ」と思って、もう本当にがっかりして小部屋に分かれている庭園美術館を巡っていったら、最後の方のコーナーにピカソと同じで陶芸とか流木を拾って作った立体作品があった。アントニー・クラベはもともと人物画、抽象的な表現ですけどもキリストとか人物が軸になるので、流木を拾って十字架のところに人形を粘土でくっつけてなんか変なオブジェを作っているのですけども、そういうのがたくさんある。いろいろな素材を使って、人形だの陶器のものだとか、まるで子供のおもちゃ箱をバーっとひっくり返したみたいに並んでいる。見ているでしょ、涙でできちゃうんですよ。なぜかという、ものすごい楽しんで作っているのがわかるんですよ。今まで愕然としてがっかりしていたのに、もう突然、別世界なんです。もうこれ楽しみの塊なんです。もう好奇心の塊。「いいな、立体物って」と思った。

ところが自分でそう思ったときに、どうしようかなと思ったときに、思い出したんですよ、粘土小僧だったことを。それで自

分がその時描いていた絵がボッシュとかブリューゲルとか、ああいうちょっと古典派の感じを現代にアレンジしたような作品だったから、結局たくさん人間がいるみたいな舞台なんです。ペテン師だの教祖だのいろんな人物、いろんな職業の人物、サラリーマンもいれば娼婦みたいな人もいるし悪魔みたいな人もいる。たくさん描いていたので、自分が描いた絵を全部人形に起こしてやろうと思って。そうするとね、コロッとできてくるんですよ、手のひらのなかで。

もうね、あの時はね、寝食を忘れるというのは本当にあのことなんだなと思いましたね。寝たり、お腹が減ったり、疲れたりするのが許せない。もうずっと作り続けたいんですよ。本当にずっと作りましたね。そのとき選んだのは非常にプリミティブで素朴なものがいいだろうということで素焼きのテラコッタの粘土を選んだんですよ。ところが僕は窯をもっていないので自然乾燥のままなので非常にもろいのですけれども、ただ土が固まっただけみたいな状態の人形がボンボンできる。でも光と影が絵と同じようにはなかなかならないんだなと思って、なるべく自分が描いた絵と同じような感じに並べて、裸電気を買ってきて、ライティングして、櫓を木で組んで、その頃は木工作業なんて全然してなかったので不細工なものですよ。それを作ってキャンバスの上でそれをステージにしてベニヤひいて。ライトがどういう感じだったかなと思って、そうだ、電気消そうと思って部屋を暗くしてパッと振り返ると、もう見たこともない世界がそこに浮かび上がっているんですよ。もう時間が凍結した世界なんですよ。これは自分が作ったものじゃないとすぐ直感しましたよね。たまたま自分が携わっただけで、もう彼らの世界がそこにある。



《覗き箱の女（テラコッタ）》1983年 ©MUTTONI
※本展では展示されていません。

——自分が作ったものではないというか。

もうね、ひょっとしたら自分が生まれるはるか前からそこにあったんじゃないか、ただ自分はそれに一瞬ある時間軸で出会えただけみたいな感覚なんですよ。それだけ衝撃的でした。でもその面白さって伝えようがない。しょうがないので写真をたくさん撮ったんですけども、面白い写真は撮れるのですが、でも違うんですよね。やっぱり触れるものじゃないと駄目なんですよ。しょうがないので、せっかくキャンバスのフレームから彼らを解放してあげたのに、もう1回箱の中に彼らを入れて、外界から邪魔されない光で、なかにちっちゃい電球を入れた。そのころは一生懸命秋葉原に通いました。何の知識もないまま秋葉原に通うと面白くて仕方がなかった。ついこの間までは画材屋に通っていて、何があるかはだいたいわかっていて欲しい物を買に行っていたのに、秋葉原では何一つわからない。すべてが新鮮でした。

——人形を作って箱のなかに人形を入れる人はいますが、ライティングにこだわって箱のなかにライトを入れるという発想はあまり人形作家にはないと思うのです。さらに箱を作る前に、そもそも人形を作り始めた最初の頃からライティングという発想が出てくるというのがなんかすごく興味深いなと思いました。

非常に重要なことだと思いますけれども、絵画なんですよ、私にとっては。

——ライティングというのは、絵画であると。

いや、イコール絵画ではなくて、絵画で学んだセオリーなのです。世の中の実際にあるものを平面に置き換える時に、実際の三次元の仕組みがどういう仕組みになっているかを観察し理解した上で平面に置き換える。それが西洋絵画の歴史なんですよ。光と影をどういうふうに解釈してその平面絵画の中で作っていくか。平面絵画の光と影って嘘ですからね。光と影のパズルでうまく組み立てていくという感じなんです。ですからそれを学んでいたので、光がない箱の中の人形はありえない。

それになぜそれだけ人形を作った時にハマってしまったかという、光を動かすと表情が本当に変わるし、物語も変わるし、そこから聞こえてくる会話も変わるし、全てが変わってしまう。平面絵画でそれをやろうと思ったら大変じゃないですか。描き換えなくちゃいけない。それが一瞬で変わっていく。あれは驚異でした。しかも人形がもし2体だとすると、人形の向きを変えるだけでその関係性が変わってくる。ドラマがある。違う話になってしまう。そうやってハマってしまった。

——ただそれを人に伝えるとなるとそれだけではむずかしい。

そうですね。だから彼らを箱の中に戻してあげて、ちょっとずつ慎重に慎重に。(焼いていない素焼きの)土の粘土だと人形同士がポツとぶつかっただけで重すぎて壊れてしまう。そこで当時出ていた石粉粘土にたどり着いて、石粉粘土でやり始めたら多少は違うのかなと思ったら全く違いましたね。石粉粘土に変えても当初は動かさないことを前提としていました。でも当てる光を動かしていくと面白い。それならば人形が動けばいい。固定した光でもターンテーブルがあって人形が回るだけで大きく変わる。土から石粉粘土に変えただけでも同じ形は作れない。



《ザ・ナイト・エンジェル・カムズ (部分)》1995 年
©MUTTONI 撮影 / 川上弘美



《ナイト・エレメント (部分)》2006 年 ©MUTTONI

——素材は大切ですね。

土に最初は色をつけないでやっていたんです。人形に色をつけるということは、「白いワイシャツ」というように言葉をつけることになってしまう。それには抵抗があったのですが、しょうがないので色をつけるようになった。どうやってつけたかという、物質をのせたいと思った。油絵の具を新聞紙でのばして油抜きして顔料みたいにすりこむんですよ。そうすればテラコッタの素材感も残るし色もつくという感じですからすごく慎重にやっていました。粘土で人形を作り出して色をつけるまでに1年、それからテラコッタ粘土をアーチスタフォルモ(註7)などの石粉粘土に置き換えて、箱の中に組むまでにさらに3年ぐらい、ちょっとずつちょっとずついろんなことを試しながら、ターンテーブルで回して人形を動かすまでにさらに2〜3年かかっているんですよ。だから最初の人形を作り出して、今みたいな箱で人形が動くようになるまでには最低7〜8年、スパンがあるんですよね。25〜6歳ぐらいからやって、31〜2歳で今みたいなものの初期型、オルゴールの動力を使った人形を作るようになったと思う。自分が最初に味わったあの驚き、人形を作って光を当てたときの驚き、それをキープするためには、どうしても人に伝えるために素材を変えていかなければいけない。ギャップを自分のなかで埋めながら、慎重に慎重

にどうやって作っていけばいいかなっていうのをやっていたのをよく覚えていますね。

———そうして作品を作ってそれを人に見せるときにお話をされるということ、声を出すことは、ムットーニさんの表現においてどういう役割を果たしているのでしょうか。

あれはまったくね、不可抗力です。最初、渋谷パルコのなかにあるロゴスギャラリー（註8）というところで1995年から個展をやらせていただいた。最初の頃、お客さんは僕のことを全然知らなかったのですが、ちょっと面白いということでテレビ局が入ってしまって、上演会に50人とか並んでしまうようになった。前の方から座っていただいたりするんですけど、何が動いてるのか、今どういうシーンなのかわからない。仕方がないから、今ね、こんな感じで動いてますよ、という説明をするようになった。

———口上が作品にとって不可欠というわけではないですね。

まったくそうではないです。

———でも語りが魅力的でそれを楽しみにしておられる方も結構いらっしゃるように見受けられます。

最初に僕の口上付きで作品を見た人は、そういうものだと思うようですね。



「ムットーニワールド からくりシアター V」 展会場の一部。テーマによって5部屋に分かれ、それぞれの部屋で作品がタイムテーブルに沿って順番に「開演」する。「公演時間」は一作品約5分前後。

———なるほど。あと必ず音楽がついてきますよね。音楽の役割はいかがでしょう。

僕は単純に音楽が好きなんですよね。中学・高校ではブラスバンドでトランペッターでした。作品が動き出してから音楽をつけるまでにやはり5～6年かかっています。すごく慎重につけていきました。最初は動力もオルゴールだった。手回しオルゴールだったり、ゼンマイ式のオルゴールだったりしたけれどもそのままの曲は使わない。オルゴールの櫛を抜いたりして変な曲にしてしまうんですよ。たまにしか鳴らなかったりとか、何か音を点描しているようなそういう効果音として使ったんですよ。ところがモーターと出会ってたくさんの人形を動かせることになって、僕はジャズが好きだったのでバンドを作りたいなと思って5～6人のバンドを作った。これはオルゴールではつまらないと思った。

曲があったら面白いかなと思ってその頃はテープでしたけれどもウォークマンみたいなものを入れて鳴らしていたのですが、あるときにそれが安易だということに気づいた。つまり音楽は音楽で一つの物語を持っている。オープニングがあってサビがあって盛り上がりあってエンディングがある。僕の作品は場面が展開したりとかそんなに動きがない。つまり音楽に持っていかれてしまう。それではどうするか。いろいろ勉強して、音楽に負けないように作品自体がちゃんとストーリー展開ができるようになれば音楽をつけても大丈夫だろう、ということで、今みたいに制御するようになった。場面によって展開したり、止まったり動いたり、待ったり待たなかったり、制御するストーリーを作ることができるようになって初めて肯定的に音楽をつけるということができたんです。

———せめぎ合いがあったわけですね。たしかに音って表現として強いですね。

そう、やはり強いです。だからマッチングというのはかなり考えます。これはセンスと経験でしかなかなか説明がつかないと思うのですが、ひょっとしたら違う曲の方が良かったという作品もあるかもしれないけれども、でも今となってはもう動き出してしまったらもう本当に観客なんだよね、俺。あとは単なるメンテのおじさんみたいな感じです。作家という感じではないです。

——そのときにはもう作品から離れている感じなのですね。

そうですね。すぐに離れますね、動いた瞬間に。勝手に動いていますね。だから自分でも拍手できちゃうんですよ。久々に見るとすごいと思う。幸せですね。

——最後にもう一度今回の展覧会の話になりますが、数十年前の作品と今回の作品の大きな違いについて教えてください。

この数十年間の時の隔たりのなかで何がどこが変わったかという、一番変わったのは人形ですね。そしてメカニクです。ある時期から作品全体のレベルを上げるために、人形をもう少し丁寧に作ったらレベルがあがるのかなと単純に考えた。僕は人形作家ではないので人形をそんなに時間をかけて丁寧に作るという意識にはならないんですよ。だからその一つの舞台の上に立つキャストとして、自分のイメージに合えばそれでいい。自分が設定した場面のなかに一つのシルエットとして置いたときにおかしくなければいい。遠くから見た時に光が当たるとそれが非常にリアルな人間に見えてしまう。むしろそういうことの方が楽しいですね。

そういう考え方だったのですが、たとえば最近作「アナザー・ウイングズ」(2023)の天使の羽、最近作った天使はその天使の羽の画像を探して、鳥の羽とか、いろんな作家さんが描いたイラストとか、実際の鳥の羽の画像を探して、その作品の大きさに合う形に加工して、何枚あったら羽らしくなるか1枚1枚数えてみたんです。160枚だったかな。それを一番太い羽から細かいのまで1枚1枚作ってみた。

そうやって実際にリアルに作ってみると、動かしたときに羽ばたいているように見えるんだよね。やっぱりその軽さがある。僕が感じているリアリティなので実際に本当の羽というわけではないのですが、ただたとえばそうやって羽を作るとしよう。その羽がついている天使ってやっぱりある程度皺とか骨格とかにリアリティがなければならなくなる。すると今度はそれに引っ張られて、彼女が寝ている祠(ほこら)、壁面、そういうものに当たる光、そういうものが動くときの動き、全部やっぱり引っ張られて、ある程度レベルを上げていかなきゃいけない。だからと言ってその作品自体のレベルが上がったかどうかはまた別の話なのです。そこら辺のバランスですよ。だから人形の顔とか羽とかも作る時には、常に仕上がりの全体像のイメージを思い浮かべながら作っていく。近視眼的にすごくうまくメカを組んだ、すごくよく羽ができた、それだけでは作品としては、レベルが上がっていくってことにはならない。そこらへんを注意しながら今は作っていますね。



ムットーニ氏



《アナザー・ウイングズ》
(操演前) 冷たい石室に葬られた乙女



《アナザー・ウイングズ》
(操演中) 石室の背面の翼を得て天井へ向かう乙女
八王子市夢美術館の動画より
こちらで出品作品が動いている一部をご覧になれます。
<https://youtu.be/yMJGSQi1A8g?si=1SE7YIPkgWy1ayHk>

註1)「ムットーニワールド からくりシアター V」2024.2.3 ～ 3.24、八王子市夢美術館（東京都八王子市）
<https://www.yumebi.com/exb.html>

註2) 特別展「ムットーニ からくりシアター展～機械仕掛けのパラダイスへ、ようこそ～」2020.2.1 ～ 3.29、藤枝市郷土博物館・文学館（静岡県藤枝市）
<https://www.city.fujieda.shizuoka.jp/material/files/group/125/muttonitirasi.pdf>

註3) 特別展「ムットーニ からくりシアターII 魅惑のムットーニ劇場へようこそ！」2022.2.5 ～ 3.27、藤枝市郷土博物館・文学館（静岡県藤枝市）
<https://www.city.fujieda.shizuoka.jp/material/files/group/125/muttoniR4.pdf>

註4)「ああ これはなんという美しい憂鬱だろう ムットーニのからくり文学館」2021.10.9 ～ 2022.1.16、前橋文学館（群馬県前橋市）
<https://www.maebashibungakukan.jp/wp-content/uploads/2021/08/210829.pdf>

註5)「ムットーニ MUTTONI - PLAY IN THE ROOM」2020.10.9 ～ 2020.10.24、KENJI TAKI GALLERY（東京都西新宿）
<https://www.kenjitaki.com/index.html>

註6)「アントニー・クラベ展 ーピカソに捧げる詩ー」1986.4.27 ～ 6.30、東京都庭園美術館（東京都港区白金台）
<https://www.teien-art-museum.ne.jp>
https://www.teien-art-museum.ne.jp/archive/exhib/past/j_ex_61.html

註7) 天然の石粉からつくられた紙粘土

註8) ログスギャラリーは渋谷パルコの地下にあったギャラリー。現在は閉店している。

ムットーニ（武藤政彦） 略歴

1956 年横浜市生まれ。工場が立ち並ぶ京浜工業 地帯で少年時代を過ごす。家に帰ると、その日見て 感じたモノを油粘土で再現して遊んでいた。十代 半ばから油彩 画を描き始め、高校卒業後、創形美術 学校に入学。卒業後、東京都国立市にアトリエを 構えのちに再び粘土による人形制作に没頭。人形、光、効果音、背景の転換 などの要素を詰め込んだ「箱」が、電動の仕掛けによりストーリー展開していくという独自の世界を確立し、高い評価を得ている。文学作品をモチーフにしたものは、世田谷文学館、前橋文学館にコレクションされている。

八王子市夢美術館

「ムットーニワールド からくりシアター V」

2 月 3 日（土）～3 月 24 日（日）

休館日 月曜日（祝日の場合は開館し、翌日休館）

開館 10:00-19:00（入館は 18 時 30 分まで）

観覧料 一般 700 円、学生（高校生以上）・65 歳以上 350 円

八王子市夢美術館 東京都八王子市八日町 8-1 ビュータワー八王子 2F

URL <https://www.yumebi.com/>



《ヘル・パラダイス（部分）》2018 年 ©MUTTONI

徒然コラム

「設立記念展」参加者の感想

今回は1月19日から21日まで開催された当会の発足を記念する「設立記念展」に参加された方のなかから、数人の方にご感想や当会への思いについて伺いました。
(順不同)

佐々木英俊



左：少年の祈り（真） 右：少年の祈り（直）

約30年前、人形作りの道に足を踏み入れた私は、島村龍児先生、菊池恵美子先生に導かれながら、独自にその人形の奥深さに没頭してきました。子供、力士、仏像、祭りなど、さまざまな題材に挑戦し、布、木毛、樹脂粘土、和紙など様々な素材を駆使して、固定ポーズ人形を製作しています。

私の人形は、彫刻でもなく、フィギュアでも、はたまた人形でもない曖昧なジャンルのように感じます。それは、ただ形を作り上げるだけでなく、その中に息づく力強い魂を追求する試みかもしれません。可愛らしさではなく、迫力や深い表情が人々の心を引きつけることを信じています。

何年経っても迷いが消えない。いまだに答えは見つけれられません。常に漂い続ける人形の旅路かもしれません。私の人形は静かに物語を語り、力強さが美しさを形成しています。30年の歳月が刻み込んだ経験が、新たな挑戦を促し、未知の世界へと導いてくれることを確信しています。

上野延子



祈り

アンケートの回答をみて、来場された方が一つ一つの作品をしっかりと見て、感じて、評価して下さっているのが分かり、勉強になり励みになりました。

今回の展覧会は駅からも近く、大きな公民館の一階のレストランの前という良い場所で、ゆったりとした会場に、色々な材料や手法で作られた個性のある作品が並んで、小規模ながらとても良い人形展だと思いました。

私はコヤエラの人形展の時、ずっとセッティングされた会場に、人形を持って行き、置いて帰り、終われば持って帰るというだけでしたが、今回たまたま、ほんの少しだけ飾りつけと、片付けのお手伝いをさせて頂き、作家の皆さんと、なごやかに作業をさせて頂いて、この人形展そのものを楽しませて頂いた気持ちになりました。

そして、この現代人形文化研究会は、こんな風に、みんなで支えあって、発展させて行かなければいけないものだと感じました。

これから先、何か私でもお役に立てる事や、お手伝いできる事がありましたら、参加させて頂きたいと思います。

大網恵美子（月乃光）



星空

現代人形研のはじめの一歩となる設立人形展に参加させて頂きましてありがとうございました。

Instagramでのライブ配信をご覧になった方から、会場に行けなかったけれど、詳しい解説付きで色々な角度から作品を見る事ができ、人形の大きさや雰囲気も動画から伝わって来てとても良かったとのお声を頂きました。多くの方に人形に接して頂ける機会として欠かせないツールだと実感しました。

会場アンケートの中に「魂が入っていきそうで怖い」という感想を拝見してクスッと和みながら、作り手にとってそれは嬉しい言葉と思いました。自分の手からもそんな作品が生まれて来てくれますようにといつも願っています。



秋の風



Mr. Blue



あなたが居なくなった日々

長谷川裕子

搬入の日、東村山の会場に入ると、チームコヤーラの時の雰囲気を思い出し懐かしい気持ちになりました。

短い三日間でしたが人形を通しての新しい出会いがあり、一人一人のお人柄が滲む人形を前に人形作りの原点を考えるきっかけとなりました。とても大切なことがギュッと詰まった貴重な時間を過ごすことが出来ました。

最終日の片づけのパワフルさはこれからの現代人形研究会の可能性に向かって進んで行く事を予感させるような爽やかな熱気を感じました。私もいい刺激を頂きながら一緒に長く歩ませて頂きたいと思っています。

ちしたかずよ

コヤーラを知ったのは8年前の公募展でした。初心者なのに「もっとうまくなってから、と先伸ばししたら次は無いかも」と応募したのは、熊本地震の影響が大きいです。その後身内に介護が必要になり私も急病で入院したりと、人形制作は後回し。これは忙しさと体力回復を言い訳にした他に、終活を考えていた事もあります。そんな時の研究会設立のお知らせでした。通信第1号の「全ては無に帰し消滅する」という西村 FELIZ さんの言葉は、思っていた死のイメージそのままに胸にしみました。

今回、設立展の動画で作家さん方の作品を拝見し、わくわくしました。自分はやっぱり人形を見るのが好きで、作ってもみたいんだなど。初心に帰り、やりたいことをやれるうちにやろうと思います。

古城真理

私は心模様を創作人形で“かたち”にしています。

創作人形に出会って、内面と外面、無意識の内にある感情などを表情という複雑なものに託して表現してゆくことに面白さを見出しています。

展示では頭の中を空っぽにして素直に見て、感じて様々の表現を楽しむことができました。

そして作家の方々との交流も楽しい時間でした。

来場者のみなさまも様々な表現を知る事ができて楽しまれていたように感じました。

多くの見る側の人も作る側の人も魅了されてしまう創作人形の世界を

未来にもつなげて行こうとする現代人形研でわたしも何かしらできれば嬉しいです。

インフォメーション

展覧会

◎八王子市夢美術館

「ムットーニワールド からくりシアター V」

2月3日(土)~3月24日(日)

休館日 月曜日(祝日の場合は開館し、翌日休館)

開館 10:00-19:00(入館は18時30分まで)

観覧料 一般 700 円、学生(高校生以上)・65 歳以上 350 円

八王子市夢美術館 東京都八王子市八日町 8-1 ビュータワー八王子 2F

URL <https://www.yumebi.com/>

つじとしゆきさんの「月光社」が「特別賞」を受賞!

◎岡本太郎美術館

「第 27 回岡本太郎現代芸術賞(TARO 賞)」

2月17日(土)~4月14日(日)

621 点の応募作から入選した 22 組の作品を展示。

開館 9:30 - 17:00 (入館 16:30 まで)

休館日 月曜日、3月21日(木)

観覧料 一般 700 円、高・大学生・65 歳以上 500 円、中学生以下は無料

同時開催 常設展「人のかたち：岡本太郎の人体表現」 4月14日(日)まで

主催 川崎市岡本太郎美術館

神奈川県川崎市多摩区枳形 7-1-5 生田緑地内

TEL 044-900-9898

URL <https://www.taromuseum.jp/>

◎ストライプハウスギャラリー (東京・六本木)

・3月1日(金)~10日(日) 菊地 拓史(立体) @ M、Bフロア

・3月2日(土)~10日(日) 齊藤修+n 作品展「道端の草花+」(写真・人形) @ 3F ギャラリー

12:00 - 19:00(最終日は18:00 終了)

※菊地拓史さんは「球体関節人形展」(東京都現代美術館 2004 年)で会場美術を担当しました。

※齊藤修さんは、エコール・ド・シモン」で四谷シモン氏に師事、人形制作をされてきて、花の写真とともに人形も2~3点展示します。「毎日目にする道端の草花を撮影しました。四季折々暑くても寒くても花を咲かせる道端の草花が健気で好きです。」

東京都港区六本木 5-10-33-3F

各展示の開催時間は下記 URL よりご確認ください。

TEL 03-3405-8108

詳細 <https://striped-house.com/>

◎ドルスバラード

第7回人形と絵の「春」展

3月13日(水)~19日(火)

丸善丸の内本店ギャラリー

詳細 ドルスバラード <http://www.dolsballad.co.jp/>

◎第11回クラフトアート人形"マッチング"コンクール 大阪展

3月6日(水)~11日(月) 10:00~20:00(最終日17:00 閉場)

阪急うめだ本店9階アートステージ

※併催・HELLO! DOLLS selection

2024年3月6日(水)~12日(火) 10:00~20:00(最終日17:00 閉場)

阪神梅田本店8階ハローカルチャー 2

※いずれも入場無料

◎杉田明十志作品展

創作人形・マリオネット・絵画を展示します。

5月2日(木)～5月13日(月)

11:00～18:00(最終日16:00) 水曜休廊

会場 静岡市葵区鷹匠2-4-40 亀山画廊

詳細(杉田) hyakueido-dolls@yahoo.co.jp

イベント

◎土井典評伝出版クラウドファンディング

通信1号でお知らせしましたが、準備が遅れております。詳細は次号でご紹介予定です。

問い合わせ DFJ プレス dfj@nonc.jp

現代人形研 これからの予定とお知らせ

【メールマガジンのアドレスは送信専用】

メールマガジンのアドレスに返信をされても返信はできません。お問い合わせは会員専用 member.gendainingyo@gmail.com までお願いいたします。

【年間スケジュール】(現時点で予定しているもの)

4月 通信第3号発行

6月 通信第4号発行予定(総会のお知らせ)

※正会員の方は総会に出席、または委任状提出をお願いいたします。

6月30日 年度末 決算

7月～8月のいずれかの日で総会を開催いたします。

11月27日～12月日

【委員会について】

編集、広報、研究、展示などの活動を広げるために委員会を設ける予定でありますが、取り組みは順次行いたいと思います。

さしあたって、「編集委員会」は活動を開始しています。この通信の編集(取材、執筆、編集、原稿整理など)に関心のある会員の方は member.gendainingyo@gmail.com 宛にメールをお送りください。参加の仕方は互いに相談しながら進めたいと思います。

【会費の更新や入会の変更】

当会の入会方法について、コヤーラ/クラブから移行される方を含め、混乱を招きご迷惑をおかけいたしました。当初は事務管理を簡略化するため「会費ペイ」に統一する予定でした。しかし更新時に「コンビニ払い」ができないことが判明、また従来の口座入金の方法を希望される方もいるので、今後はコヤーラ・クラブと同じ方法で当会のゆうちょ銀行口座へのご入金で「入会」「更新」を受付いたします。「会費ペイ」は引き続きご利用になれます。クレジットカード払いをご希望の方はご利用ください。「会費ペイ」では更新時に会費が自動引き落としされます。

6月30日が年度末となります。翌年度の会費は7月26日までにご入金いただくことになります。

6月の通信で詳しくご案内したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

会員の皆様へ

・投稿募集 展覧会レポート、論考などこの通信で発表したい原稿がありましたら、会員連絡用 Email アドレス宛までお知らせください。掲載について検討させていただきます。

・展覧会・イベント情報 会員が投稿できる一般公開用ブログを準備中です。しばらくお待ちください。

現代人形研通信 創刊号 2024年2月23日発行

特定非営利活動法人 現代人形文化研究会

189-0003 東京都東村山市久米川町3丁目27-57 TEL 042-395-7547 (ノンクプラッツ内)

会員連絡用 Email member.gendainingyo@gmail.com

本ページの画像や記事の無断転載を禁じます。©2024 NPO GENDAININGYOBUNKAKENKYUKAI